

新大橋

大江戸より本所へわたしたる橋を、兩國の橋とぞよぶ、いにしへの川よりをちはまもつふさの國なりければ、まかなづけたりとあるひといひき、在五中將業○在平原のとほくもきにけるかなとわび給ひしすみだ川は、此かみつ瀬にして、淺草なる大ひざも、このながれよりとりあげ奉りけるとぞ、ふじのねはさらなり、ますかげはなしとよめるつくばの山も、手にとるばかり見ゆ、そこらゆきかふ舟のおほかるは、たゞ柳の葉をこきちらしたるがごとし、夏のころはことに舟あまたつどひて、いと竹の音、川波にひゞきあひて、おそろしきまで聞ゆ、げにひろき都の中にもなぞらふべき所だになく、こよなうにぎはしきわたりになむ、

〔江戸砂子〕新大橋 兩國の川下 長凡百間餘

元祿六年始てかゝる

〔江戸名所圖會〕新大橋 兩國橋より川下の方、濱町より深川六間堀へ架す、長凡百八間あり、此橋は元祿六年癸酉始て是をかけ給ふ、兩國橋の舊名を大橋と云、故に其名によつて新大橋と號らるゝとなり、

〔泰平年表 嚴有院〕新大橋は、元祿六年○中に架る、

〔事蹟合考〕新大橋永代橋之事

元祿十○十、恐六六、誤年の頃、新大橋懸らるゝ、

〔翁草〕五 江府新大橋之事

桂昌院殿○將軍徳川綱吉母本庄氏は、元卑賤より出給ふといへども、其操正敷御善行勝て計へがたし、○中

將軍家○綱吉御厄年の事とかや、諸寺諸山の御祈りなどいと惴成けるに、右ニ仍桂昌公より御願の一筋有、御聞届有て給ひてんやとの御事なりしに、素より綱吉公には御至孝の御志なれば、如何様の御願成とも仰玉へ、叶へ參らせ侍らんとの御答也、時に桂昌公の宣く、餘の願ニハ侍らず、